

論文概要書

形容詞の日中対照研究

孫 琦

論文概要書

形容詞の日中対照研究

孫 琦

本論文は、日本語と中国語の形容詞について、対照研究を試みようとするものである。本研究では、言語事実をとらえるために、実例を中心とし、中国語から日本語へ、また日本語から中国語へと両方向の視点をもって実証的な考察を行った。形容詞という日中両言語に共通する品詞の枠組みの中で、特に連用修飾用法に重きを置き、日本語と中国語の対応関係にある表現の類似や相違を記述し、比較対照という作業を通じて、各言語表現が持つ特徴を明確な形で提示し、その違いを明らかにする。本研究は、このような考えに基づき、日本語と中国語の比較を中心とし、言語現象の分析を試みるものである。形容詞を研究の対象に選んだのは、どちらの言語においても形容詞は動詞とともに、比較的とらえやすい品詞であることと、形容詞の構文的機能については日本語と中国語はよく似ているからである。形容詞は文中では、事柄や機能などについて詳しく形容し限定するという修飾の作用は日中両言語が共通し、語彙的にもとらえやすく、構文的には問題が多いものの、非常に特徴がはっきり現れるものである。日本語においては、いわゆる形容動詞を含まない狭義の形容詞を考察対象とした。日本語の形容詞は、形の上では「イ」で言い切ることを特徴とする。意味の上からは、客観的な性質・状態の表現をなす（属性形容詞）と、主観的な感覚・感情の表現をなす（感情形容詞）とに区別することが一般的である。これに対し、中国語の形容詞は、単純形式（「简单形式」）と複雑形式（「复杂形式」）に分類され、単純形式には一音節形容詞と一般二音節形容詞がある。複雑形式には、重ね型と、接辞を伴う形容詞と、重ね型が XYXY 式になる二音節形容詞と、形容詞中心の合成語の四つに分類されている。このように形の上から形容詞を分類している。形の上での違いが意味や文法機能の違いを反映し、それが中国語の形容詞の特徴であるといえよう。

本研究の焦点となる形容詞の連用用法については、連語の動詞を修飾し、動きの様子や程度を形容する機能、つまり連用修飾機能において、中国語と日本語は共通している点が多いため、対照研究が可能となった。中国語の形容詞は連用用法で用いられる際に、多くは厳しい制限があることが特徴的である。特に、形容詞の単純形式とその重ね型の修飾機能や描写作用

本論文は、日本語と中国語の形容詞について、対照研究を試みようとするものである。本研究では、言語事実をとらえるために、実例を中心とし、中国語から日本語へ、また日本語から中国語へと両方向の視点をもって実証的な考察を行った。形容詞という日中両言語に共通する品詞の枠組みの中で、特に連用修飾用法に焦点を当て、日本語と中国語の対応関係にある表現の類似や相違を記述し、比較対照という作業を通じて、各言語表現が持つ特徴を明瞭な形で浮かび上がらせることができると考える。本研究は、このような考えに沿って、日本語と中国語の比較を中心に、言語現象の分析を試みるものである。形容詞を研究の対象に選んだのは、どちらの言語においても形容詞は動詞とともに、比較的とらえやすい品詞であることと、形容詞の構文的機能については日本語と中国語はよく似ているからである。形容詞は文中では、事柄や様態などについて詳しく形容し限定するという修飾の作用は日中両言語が共通し、語彙的にもとらえやすく、構文的には問題が多いものの、非常に特徴がはっきり現れるものである。

日本語においては、いわゆる形容動詞を含まない狭義の形容詞を考察対象とした。日本語の形容詞は、形の上では「イ」で言い切ることを特徴とする。意味の上からは、客観的な性質・状態の表現をなす〈属性形容詞〉と、主観的な感覚・感情の表現をなす〈感情形容詞〉とに区別することが一般的である。これに対し、中国語の形容詞は、単純形式（「简单形式」）と複雑形式（「复杂形式」）に分類され、単純形式には一音節形容詞と一般二音節形容詞がある。複雑形式には、重ね型と、接辞を伴う形容詞と、重ね型が XYXY 式になる二音節形容詞と、形容詞中心の合成語の四つに分類されている。このように形の上から形容詞を分類している。形の上での違いが意味や文法機能の違いを直接反映していることが、中国語の形容詞の特徴であるといえよう。

本研究の焦点となる形容詞の連用用法については、述語の動詞を修飾し、動きの様子や程度を形容する機能、つまり連用修飾機能において、中国語と日本語は共通している点が多いため、対照研究が可能となった。中国語の形容詞は連用用法で用いられる際に、多くは厳しい制限があることが特徴的である。特に、形容詞の単純形式とその重ね型の修飾機能や描写作用

は大きく異なり、この点はもつとも日本語の形容詞と違う点である。また、形容詞の連用用法は副詞的用法とも呼ばれるように、副詞に近い働きをする。形容詞の連用用法においては、日本語と中国語の典型的に対応する部分から出発したが、日本語から中国語、あるいは中国語から日本語の対訳資料を用いて用例を採集すると、対応する表現において一方の言語に必ずしも形容詞が現れるとは限らない。形容詞との間に何らかの関連性がある可能性を想定し、より広い範囲の表現形式を考察対象とした。そして、分析段階では、むしろこのような異なる表現形式が現れることで、日中形容詞の本質的な相違点が見えてくるといえる。単に中国語の形容詞と日本語の形容詞における一対一の意味や用法の対照ではなく、修飾用法の中に現れた形容詞と動詞、さらに対象の名詞との関係をより細かに分析することによって、両言語における形容詞の働きの類似点と相違点が顕著に現れるはずである。

本研究で使用した例文はすべて実例である。これまでの対照研究では作例によって論を進めるものが多く、特に訳例の場合は著者の自ら翻訳したものがほとんどであるため、用例自体は客観性に欠け、ひいては論全体に影響を及ぼす恐れがある。このようなことを避けるため、本研究では訳例もすべて出版された翻訳本から採取したものを使用した。一つの原本に対して異なる訳本がある場合、すべて対象にした。類似する構文や文法範疇の比較は、形態論な観点から表現論に至る各レベルで行うことを試み、比較基準は、形態的特質、そして構文的機能、さらに表現的特徴の三つの方面を総合的に対照を行った。以下では、順を追って各章で明らかになったことを要約する。

本研究は、第一部（第一章・第二章）、第二部（第三章・第四章・第五章・第六章）、第三部（第七章・第八章）から構成される。

第一部では、連用用法における属性形容詞と感情形容詞のそれぞれについて対照を行うことによって、属性形容詞の表す程度性と修飾の関係、そして日中感情表現の特徴をとらえた。第一章では、日中形容詞の基本的な分類や用法をまとめ、本研究における形容詞対照研究の基本的枠組を設定した。第二章では、日本語と中国語の物の属性を表す形容詞を、対義関係

にある二つの形容詞の対応関係という視点から、その連用用法について考察を行った。結果修飾と様態修飾のそれぞれの場合において、両言語の形容詞用法の特質が明らかになった。

対義関係にある形容詞の連用用法の特徴として、形容詞の属性的意味から程度性の意味への抽象化の過程において、特に程度の小さいほうを表す形容詞には意味の抽象化がされにくいことは両言語が共通している。日本語と中国語のどちらにおいても、表現上の必要性を考えれば、形容詞対義語の用法に非対応が生じるのである。相違点として、動作の様態について修飾する用法では、中国語の形容詞は日本語の形容詞に比べ、対義語ペアの形容詞が対応しているものが多い。中国語の形容詞が重ね型になることによって「性質形容詞」から「状態形容詞」に変わり、描写性が増し、動作の生き生きとした様子について描写する機能が備えられていることを意味している。そのため、程度の小さいほうの形容詞も様態描写に用いられることができるのである。

感情を表す語句による連用修飾について、全体的に、日本語の感情形容詞は連用形のままでは、人間の様子や感情を客観的に表すのには用いられにくいことがわかった。それを叙述するには、日本語では様々な構文的工夫が必要である。「～そうに、～げに」や「びくびく、いらいら、ドキドキ」のような外面に現れる人間の様子、態度、感情を表す形容動詞や副詞を用いて表現することや、また、感情形容詞を用いる場合、連用形ではなく、ほかの構文的要素を介在させ、内面的感情を客観化・状況化させるような構文的工夫が必要となる。一方、中国語の連用修飾による感情表現の場合、人称にかかわらず一般的に「形容詞＋（地）＋動詞」の状語の形でそのまま表現することができる。中国語では感情形容詞による連用修飾が一般的に見られるのは、中国語の状態形容詞は日本語の感情形容詞に比べて描写性に富んでおり、言い換えれば人間の主観的一時的な感情を表すより、客観的な描写性が備わっているからであるといえる。このような感情を表す形容詞の日中両語の意味機能の違いが、連用修飾の構文については人称の制限にも反映していると考えられるのである。

第二部では、対訳資料を用いて、日本語から中国語へ、そして中国語か

ら日本語への両方の視点から、日本語と中国語の形容詞による連用修飾構文の相違点が明らかになった。第三章では、日本語から中国語に翻訳された文学作品を資料として、日本語の形容詞による連用修飾の場合、中国語の訳文ではどのような構文で対応しているかを調べた。その結果、日本語では形容詞による連用修飾の構文が、中国語では五つの構文パターンで対応していることがわかった。この中で、最も用例が多く見られたのは、中国語の形容詞が状語として動詞を修飾する場合である。このことは、日本語と中国語の形容詞による連用修飾の多くは構文的にはほぼ対応していることを意味している。また、形容詞が動詞の後ろに位置し、その様態を修飾限定する中国語形容詞の補語としての用法も、日本語との対応で見られた。形容詞補語は主に動作や行為が行われることによって主体あるいは対象に変化が生じ、状態が変化した後の様子について叙述する場合の状態描写である。この点は形容詞状語との修飾機能が異なる。日本語の原文における形容詞と動詞の関係、さらに主体や対象との意味的な関わりによって、中国語では状語と補語を使い分けている。中国語では副詞によって動作の様態を修飾する場合については、これは日中両語の語彙体系の違いによるものであると考えられる。つまり、日本語の形容詞が連用修飾で用いられている意味に対応する中国語は、形容詞ではなく副詞になる場合である。連用用法で用いられる形容詞は、本来の属性的意味から抽象化されて程度性を表すことになるため、対応する中国語の形容詞にはそのような意味の抽象化ができない場合がしばしばある。したがって、副詞によって表現するほかないのである。同じ現象が第四章の中国語から日本語に訳される場合の対応にも見られる。

第三節で取り上げている中国語の連体用法と対応する場合について、日本語の形容詞による連用修飾の構文が中国語では形容詞の状語あるいは補語による連用修飾の形で表現できないという日中形容詞用法の非対応は、統語上から中国語では連体用法への変換に必然性があると考えられる。修飾語である形容詞の表す意味が被修飾語の動詞に直接かかるのではなく、主体あるいは対象の状態を表すと考えられる場合においては、中国語では形容詞の連体用法が用いられている。事物の属性を表す形容詞が修飾語になる

場合、日本語と中国語のこのような違いは特に顕著なようである。中国語訳文ではその他の表現形式に変換して、日本語の形容詞連用修飾文と対応する場合については、特に日本語の形容詞と状態動詞による連用修飾の構文との中国語の対応のしかたは、非常に特徴的に現れた一つの対応パターンであるといえる。日本語では形容詞が動詞の表す動きなどについて修飾限定しているのではなく、形容詞と動詞が並列的に主体のある状態について述べていると考えられる場合においては、中国語では形容詞の並列や形容詞によって対応している。

第四章では、実例に基づき、中国語の形容詞が動詞を修飾する際の日本語訳を、五つのパターンに整理することができた。中国語の形容詞による連用修飾句が日本語に訳されるとき、日本語では副詞による修飾が目立つ。オノマトペを含む副詞による連用修飾で対応しているものは全用例訳の三割を超える。この特徴といえる対応について、第三節では三つの側面からの分析を試みた。人間の態度や感情を表す日本語の感情形容詞が人称制限を受けるのに対して、中国語の形容詞にはこういう人称制限はほとんどない。原作の中では、第一人称でも第三人称でも中国語では自由に形容詞を用いて、その人物の心の状態を表現することができるが、日本語に翻訳される際に、感情形容詞の人称制限により、三人称の場合「感情形容詞＋そうに／げに」の形容動詞連用形による様態修飾は見られるが、第一人称となると、「嬉しく／はずかしく／にくにくしく…」と、形容詞の連用修飾そのままの形では表現しにくい。このため、日本語ではその他の様態副詞などによって動詞を修飾している。述語を修飾する機能においては、日本語の擬態語も形容詞に近い働きをしているとみることができる。一方、中国語では、後置成分をおく形容詞や一音節形容詞と二音節形容詞の重ね型は、繰り返すことによってオノマトペ的な語感を出すという機能をもち、しかも自由に述語動詞を修飾することができ、事態の生き生きとしたイメージを描写することができる。中国語の形容詞が本来持っているこのような描写機能は日本語の形容詞にはない。特に、主体が動作を行うときの心理描写に用いられる中国語の形容詞が日本語に訳される場合、日本語の形容詞には対応するものがなく、形容詞を用いることはむずかしい。その代わり

に金田一春彦がいう「擬情語」が多用される。この点は、日中の形容詞の特質であると言える。日本語では動詞句で対応するほとんどの場合は、状態動詞による修飾である。中国語では形容詞が状語となり動詞の表す様子について詳しく述べているが、日本語の訳文では多くは状態動詞の連用形「～て」や「～しながら」「～ように」などの形で、「喜んで、あわてて、落ち着いて」などのように、その様子を具体的に述べ、後接の動詞にかかって連用修飾の構文をとって中国語の原文と対応している。連用用法においては、中国語の形容詞と日本語の動詞、特に状態動詞との関係も密接であることが両者の表現上の対応からはっきり現れてきた。中国語の形容詞に対して、日本語訳ではその他の句形式に置き換えて表現する場合や対応する訳が見られない場合は、もっとも意識的な訳し方であるといえる。

このような表現形式の対応には訳者の恣意性やその他多くの要因が関わっているように思われる。その中では、中国語の形容詞に対して、日本語では「～口調で、～気持ちで、～様子で」のように名詞句の形で、動作や行為が行われたときの主体の様子について修飾しているものが多く見られ、これは行為主体の人称制限が関係しているため、日本語では形容詞による連用修飾の形がとりにくいという点が挙げられる。このように、中国語の形容詞による連用修飾の構文が、日本語では形容詞以外にさまざまな表現で対応している。日本語の形容詞が語彙としての発達が途中でとまってしまったせいか、それ以外の副詞や動詞によってその役割を補っていることが、中国語との対照によって、そして形容詞を含む連用用法全体からみて、そのことがよりいっそう明確になってきた。

第五章では、今までの考察結果を踏まえ、日中形容詞の連用修飾における共通の枠組みを設けて対照を行い、日本語の連用修飾語と中国語の「状語」「補語」の関係を明らかにした。動詞を修飾するとき、日本語では形容詞が連用修飾語となるが、中国語では形容詞が「状語」と「補語」の二つの形をとることができる。それぞれの修飾の特徴及び日本語との対応について論じた。中国語の形容詞が「状語」として述語動詞を修飾する際、動きの様態や程度を修飾限定するほかに、行為主体の内的感情や態度を形容するのが主な働きであるといえる。一方では、形容詞が「補語」として用

いられる場合は「状語」と異なり、行為の結果について形容するものが多い。また、日本語の形容詞による連用修飾のうち、形容詞の意味が主体にかかり、その内的側面を形容する場合は少なく、多くの場合は形容詞が意味的に述語動詞にかかり、動作そのものの修飾として用いられている。日本語の形容詞は、連用用法ではさまざまな修飾機能をあわせ持ち、形容詞と動詞、さらに主体や対象との意味関係によって、形容詞がどの側面について意味的にかかっているかを判断する。一方、中国語の形容詞は、動詞やその他の構文成分との意味関係のほかに、現れる位置によってその修飾の機能が異なってくる、というところに非常に特徴的である。また、動作が行われるときの人間の内面的感情や心理を、そのまま形容詞によって表現されることは、日本語ではあまり一般的ではないこともわかった。これに対して、中国語の形容詞状語はこのような修飾の機能が非常に発達しており、ある主体がどのような気持ちや態度である行為を行ったかを、ストレートにかつ簡潔に描写することができる。

第六章では、本来物の静的な性質を表す属性形容詞（「赤い」「白い」「熱い」「冷たい」）が動詞と結びつき、意味的には主体あるいは対象の状態を形容する修飾機能である「状態修飾」を取り上げ、修飾語となる形容詞と被修飾語となる動詞の意味的特徴、そして連用修飾構文の文法的特徴という三つの視点を合わせて、実例に基づき分析を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。「状態修飾」という日中形容詞が共通する文法的枠組みの中において、連用と連体の対応について、構文的特徴からタイプⅠとタイプⅡに分かれることが明らかになった。タイプⅠは、[Vする最中の状態において、NがA]で、タイプⅡは、[Vすることによって、NがA]である。中国語の形容詞は、類義的な意味を持つさまざまな語を考察対象としたが、日本語では状態修飾の用例が多く集まったのに対し、中国語の色彩形容詞が連用修飾語として用いられる例は少なかった。タイプⅠに属するものがほとんどであった。

その理由としては、被修飾語となる動詞の意味特徴とかかわっていることがわかった。日本語ではよく見られるいわゆる状態動詞が用いられる連用修飾の形が、中国語ではあまり見られないのである。その一方、中国語

では、形容詞の被修飾語には動作性動詞が多く用いられ、タイプⅠの状態修飾が一般的であった。連用と連体に対応している場合の表現的意味の違いについて、人間共通の感受性に基づく言語の表現過程においては、日本語と中国語は共通している。物の静的な属性を表す色彩形容詞や温度形容詞が述語動詞にかかる場合、日本語の形容詞はいわゆる状態動詞の表す様態を修飾限定するのが主な働きであるのに対して、中国語の形容詞は動作性動詞の表す様態を修飾限定するものが多い。したがって、日本語の場合は形容詞と動詞が決まったペアが多く、形容詞の表す属性的意味と動詞の表す状态的意味との間、意味的関連性が認められるものがほとんどである。一方、中国語ではそのような意味的関連性がなくても、形容詞と動詞の連用修飾関係が成り立つ。ただし、中国語のこのような状態修飾の構文はやはり文学的な表現が多く、話しことばなどではむしろこのような属性形容詞が連体用法で用いられるのが一般的である。

形容詞の状態修飾に現れた日本語と中国語のこのような違いは、次のようにその理由を考えることができる。つまり、主体の状態を表す形容詞は、行為や動作を表す動詞との関係において、日本語に比べ中国語のほうが非常に強い結びつきで連用修飾節を形成することができる。日本語は一般的に、形容詞と動詞の間に何らかの意味的関連性のもとに修飾語と被修飾語の関係が成り立つのに対して、中国語は状態性を表す形容詞と動作性を表す動詞の間に、直接の意味的関連性を見出せなくても、連用修飾という形によって、両者をそのまま結びつけることができるのである。すなわち、行為が実現されるそのときの主体や対象の状態を形容詞によって描写し、それをそのまま連用修飾成分として動詞にかかる。このような直接的に比較的自由に別々にとらえた事象を一体化して描出する機能が、中国語形容詞の連用修飾が備わっているといえる。一方、日本語ではある状態的变化になることによって引き起こされた主体あるいは対象の状態を形容詞で表し、それが状態動詞の修飾語となって連用修飾節を構成する場合が多い。ある意味では非常に論理的で、修飾語と被修飾語の間にはっきりした意味的かかわりが存在するため、あまり自由に組み合わせることが許されない。このような特徴は感情形容詞の連用修飾用法においても顕著に現れている。

第三部では、形容詞対照研究の一環として、日中様相類疊語及び中国語のA B B型派生形容詞と日本語の関係について検討した。第七章では、形容詞研究の周辺的なものとして、日中両語における様相類を表す疊語についての考察を行った。日本語疊語の数及び種類を調査し、日本語の漢語疊語255語のうち、約8割以上を占めているA A型の二字漢語疊語210語について、『漢語大詞典』をもとに中国語の出典があるかどうか調べた。中国語にはないもので、日本で造語された可能性の高い漢語疊語16語を、それぞれの造語パターンによって分類を試みた。また、疊語としての使用例は確認できるが、安定した語形として辞書に採録されないものが中国語には多く存在することについて、中国語の一音節形容詞は特に文の成分として修飾語になる場合、疊語の形をとるのが一般的であるため、それはあくまで形容詞の用法にすぎないことがいえる。多くの場合、疊語の語形が辞書の見出し語として掲載されないことは中国語形容詞の特徴である。具体的な分析例として「悠々」「堂々」「徐々」を例にして、辞書の記述と実際の用例に基づいて、日本語と中国語におけるこのような同形語の意味特徴や文法機能の違いを示した。日中同形語とされるこのような様相類疊語は、共通する部分が多い中、文体や時代によって意味や用法に違いが生じたり、日本語と中国語の間にずれが見られたりすることが、辞書の記述や実例による用法の観察によって明らかになった。

第八章では、中国語のA B B型派生形容詞を対象に、その種類や語構成の面から考察を行い、さらに日本語との対照を通して修飾用法の特徴が明らかになった。中国語のA B B型派生形容詞の数と種類を辞書や辞典類によって調査し、550語(166項)のA B B接辞型形容詞を対象とした。Aの品詞性については、形容詞・動詞・名詞のいずれも確認できたが、中には最も多いのはAが形容詞の場合である。B Bの造語力については、「乎乎」のように多数のAの後ろにつけられるものがある。「乎乎」は実詞的意味(語彙的意味)はなく、もっぱら接辞として使われ、造語力の高い形容詞接尾辞である。一方、特定のAの後ろにのみ付けられるB Bもあり、ある語専用の接尾辞となるものであるといえる。次に、連体用法から中国語のA B B型形容詞と日本語の対応について考察し、日本語の形容詞に対応す

る中国語のA B B型形容詞は、形容詞Aから派生したA B B型形容詞は多種多様で、「B B」の表す付加的意味によって、名詞を修飾する際に使い分けているという特徴が見られた。連体修飾で用いられる中国語のA B B型形容詞に対応する日本語訳については、日本語の形容詞は中国語の形容詞と違って、特に文法的制限がなく、自由に用いられることができる。訳文では形容詞以外にも様態副詞や名詞などによる修飾が見られる。さらに、連用用法で用いられる中国語のA B B型形容詞についても考察し、主体・対象の状態修飾の場合、日本語の形容詞連用修飾文が中国語に訳される際、A B B型形容詞による連体修飾文に変換されることが多いことがわかった。一方、述語の様態修飾に関しては、日本語と中国語のどちらから見ても、中国語のA B B型形容詞と日本語の様態副詞との対応関係がみられる。これは中国語のA B B型形容詞は様態描写が主な表現機能であることと、日本語の擬態語との表現効果に共通するところがあることと関係しているからであろう。中国語の形容詞は一般的に文法的制限が日本語に比べ厳しいために、その派生形が発達したと考えられる。また、豊富な様態副詞をもつ日本語と対照的に、中国語では派生形容詞が様態修飾の役割を果たしているといえよう。中国語の形容詞重ね型A Aの表現機能は主に程度の強調であるのに対し、A B B型形容詞は修飾する対象によって、付加的意味特徴によってさまざまな表現効果を生み出すことができる。A B B型形容詞を用いた場合、物あるいは行為の修飾に重点があり、状態描写の機能を持つことがいっそう明らかになった。

以上により、本論文では、日本語と中国語の形容詞を対照的に分析することにより、四つの特徴を抽出することができた。すなわち、一つには中国語の形容詞においては、形態による用法の違いが日本語の形容詞に比べ特徴的である。二つには、中国語の派生形容詞が日本語の様態副詞との対応関係が明らかになった。これは、中国語のA B B型形容詞は様態描写が主な表現機能であることと、日本語の擬態語との表現効果に共通するところがあることが関係しているからであろう。三つには、日本語の連用修飾構造に対応する中国語の「状語」と「補語」による修飾構造の違いが特徴的に現れた。そして、最後に、表現論的な視点から、日中形容詞による感

情表現、および状態修飾に現れる形容詞と動詞の結びつきから、日中形容詞の描写機能の違いがはっきりと現れた。このような方法で形容詞を比較・対照することにより、今後さらに日中形容詞の連体用法の比較、および日本語の形容動詞との関係を視野に入れて検討することが期待される。